銭湯の監視バイトに応募した女子、男湯に入った同級生のおちんちんを見ちゃう！

高校2年生の夏休み、亜依は少し迷いながらもアルバイトを探していた。

両親から「今年はちゃんと働いてお金を貯めなさい」と言われ、近所の老舗銭湯の求人を見つけた。

仕事内容は「風呂場の監視業務」。

モニターを見て、トラブルがあれば報告するだけ。

掃除や接客ではなく、座ってできる簡単な仕事と書いてあった。

時給1100円。

「これなら夏休み中に結構貯まるかも」と、亜依は履歴書を持って店に飛び込んだ。

店長のおじいさんは、亜依の顔を見ると優しく微笑んだ。

「女の子が来てくれるのは珍しいね、最近カメラを全部新しくしたんだ。

男湯も女湯もちゃんと見張っててくれればいい。

何かあったらすぐフロントに連絡してくれ。プライバシーは厳守だから安心して」

亜依は一瞬「男湯も……？」と思ったが、店長は「女湯だけじゃトラブル対応できないからね」と当然のように言った。

面接はあっさり通り、翌日から夕方5時～9時のシフトが決まった。

初出勤の日。

亜依は緊張しながら裏口から入り、従業員通路を進んだ。

モニター室は銭湯の奥にある小さな部屋で、ドアを開けると冷房が効いた静かな空間が広がっていた。

中央のデスクに4台のモニターが並び、男湯と女湯の脱衣所・洗い場・浴槽がそれぞれ映し出されている。

先輩の大学生・拓也さんが待っていた。

「おう、新人の亜依ちゃんか。今日は俺が教えるよ。座って」

拓也さんは淡々と説明を始めた。

「基本はここに座って画面を見てればいい。

誰かが倒れたり、喧嘩になったり、変な客が入ってきたらインターホンでフロントに連絡。

それだけ。

仕事だから、ちゃんと見ててくれ」

亜依は小さく頷いたが、心の中はざわついていた。

「男湯も……見るんですか？」

「当たり前だろ。トラブルは男湯でも起こるから。

最初は戸惑うかもしれないけど、仕事だから淡々と。

じゃあ俺はこれで上がるわ。

今日はピークタイムまでしっかり見ててくれ。

何かあったらすぐ連絡。

じゃあよろしくな」

拓也さんはそう言い残して部屋を出て行った。

ドアが閉まる音が響き、亜依は一人きりになった。

部屋は急に静かになった。

エアコンの音だけが低く響く中、亜依は深呼吸をしてモニターに向き合った。

最初は女湯の画面をまじめに見ていた。

おばさんたちが体を洗っている姿、母親と娘のやり取り。

見慣れた光景で、特に動揺はない。

しかし、隣のモニター――男湯の画面に視線が自然と移った瞬間、亜依の顔が一気に熱くなった。

「え……」

男湯の脱衣所では、男性客たちが服を脱いでいる。

サラリーマン風のおじさん、中年の男性、そして若い学生らしい男の子たち。

パンツを下ろした瞬間、次々とおちんちんが現れる。